

～well-beingへの道～

日本福祉文化学会事務局 〒165-0026 東京都中野区新井 2-12-10 芸術教育研究所内 Tel/Fax: 03-5942-8510 E-mail: fukushibunka@lagoon.ocn.ne.jp

4月より第6期新役員体制に移行します。

お祝い申し上げます。

お願ひいたしました。

バトンタッチ

河東田博 (日本福祉文化学会会長)



この6年間私たちは新しい魅力のある学会作りを目指し、(1)事務局体制の安定化、組織運営の明確化、地方ブロックの活性化、大会運営・現場セミナーの継続性など、学会運営の不十分な点を改善し、(2)「福祉文化」概念をわかりやすくし、誰もが参加可能な学会にしていく取組みを行ってきた。幸い、(1)については、徐々に実を結びつつある。(2)についても、研究委員会や菌田顧問のご尽力により、わかりやすい「福祉文化」概念の整理ができるようになってきた。この二つの核となる取組みを今後も引き続き追究し、より一層魅力ある学会とし、会員の満足度の向上と会員増及び会員の多様化に対応できるようにしていただいたい。こうした取組みの結果として、3年後には会員倍増を果たし、参加すると元気になって現場に帰っていくことができる新生学会となっていくに違いない。馬場新会長を先頭に新生学会に向けた活発な取組みを展開していただきたい。

フムフムナルホド・ワクワクドキドキがキーワード ～新年・日本福祉文化学会が目指すもの～

馬場清 (日本福祉文化学会副会長)

1989年7月16日。記念すべき福祉文化学会発会式の際に、私は司会席に座っていた。当時、高校の非常勤講師であった私にとって、「学会」というおおよそ自分の過ごしてきた世界とは無関係な所であり、かなり場違いな雰囲気を感じていた。しかし、「新しい福祉の価値を創っていくこう!」「福祉社会を変えていくこう!」そんなエネルギーに触れ、期待に胸を躍らせたものだった。

それから四半世紀。3代目の会長となることが決まった。正直、会長職を引き受けるにあたっては、かなり逡巡したが、これまでの恩返しをしようと引き受けることに決めた。

ご存じの通り学会は今、大きな転換期にある。そして時代も大きく変化している。その中で、会員の方々とともに「人間の幸せとは何か」について、じっくりと考えていきたい。

そのために、私が掲げたスローガンが以下の2つである。①フムフムナルホドと気づきのある学会に!



②ワクワクドキドキ
するような魅力的な学会に!

このフリーズには、一番ヶ瀬康子元会長がよく言っていた「冷たい頭と熱い胸」というイギリスの経済学者マーシャルのことばの意味が込められている。

すなわち、冷徹な頭で福祉現場で起きている現象を文化の視点から理論化して、それを学び合うこと(フムフムナルホド)。そしてあらゆる人たちの知恵と実行力を結集して、学びの成果を熱い想いで実現すること(ワクワクドキドキ)。そんな「両輪」が常に動いている学会にしていきたい。

しかしことはそんな簡単ではない。この3年間、会員のひとりひとりの力を借りながら、一步一歩進んでいきたいと思っている。是非ご協力ください。

第6期役員体制を紹介します。

会長 馬場 清

副会長 岡村ヒロ子/永山 誠

理事 渡邊 豊/多田千尋/川北典子/佐藤嗣道/稲田泰紀/藤原一秀/月田みづえ/佐々木隆夫/今野道裕/梅津迪子/坂本道子/石井パークマン麻子/脇坂博史/松原徹/日比野正己

評議員 相内真子/小坂享子/結城俊哉/大澤澄男/福山正和/志賀俊紀/和泉とみ代/太田貞司/久保美紀/本多洋実/中野洋

監事 五十嵐真一/加藤美枝

顧問 菌田碩哉

事務局 前嶋 元/阿比留久美/高山陽子

北陸ブロック報告

「阿賀に生きる」
阿賀の暮らし」
交流セミナー

日時 平成26年9月27日(土)
28日(日)
内容 「阿賀に生きる」上映会、
講演会、当事者の方と交流

東京大会分科会に続くセミナーとして、旗野秀人氏より、新潟水俣病や地域の文化活動に関して講演と当事者の方との交流セミナーを開催した。

80〜90歳台となった4人の当事者の女性（水俣病未認定患者）か



旗野さんを囲んで座談会

九州ブロック報告

昨年10月の全国大会(大分大会)には遠方から多数の皆さまから参加いただきありがとうございました。沢山の素晴らしい出会いに感謝しています。

大会の様子などは福祉文化通信75号(平成26年12月発行号)、または学会のホームページに掲載しています。

大会後、大会の感動を忘れないように、また、大会の思い出に感銘を受けた別府ナースングホーム泰生園のスタッフが「詩・短歌・俳句集」を作成しました。



趣のある手づくり詩集

日々感じていることや日常の生活を豊かにするものなどを掲載しています。

作成した詩集は泰生園の中で利用者さんと声に出して読んだり、共感したり、笑いあったりと活用しています。

ら、発症までどの様な暮らしをしてきたか、水俣病の原因に対してどのような地域(文化の中)で生活していたか語られた。病气への偏見と差別が強いことも語られたが、なんと笑顔で表情のよいことか。愚痴めいたことを言わず、人生を達観した者にしか与えられない表情であった。帰り際「もう、帰るのかえ」とぬくもりのある小さな手で握り締めてくれたばばさま。懐に飛び込んで泣きたくなるような切なさを感じた瞬間であった。

書物や資料・メディアで知っているつもり知識も現場に佇み、自分の五感で感じるこの大切さを痛感した。

関東ブロック報告

第3回
クロスブロック
セミナー

「福祉現場で求められる職員の質とは何か?」
「虐待事例を通して現場職員が語る」

日時: 3月14日(土)
13:00〜16:00
場所: 立教大学池袋キャンパス
16号館第一会議室

詳細な内容は学会HPに報告を

2015年度の全国大会、神戸に決定!

大会テーマ:

「地域文化から福祉をみる」
「大震災後20年の神戸から」

10月24(土)・25(日)、皆が出会う日にしましょう……。

第26回全国大会は奇しくも阪神淡路大震災から20年の節目の年に神戸で開催することに決まりました。場所は「人と防災未来センター」兵庫県立美術館ミュージアムホール・兵庫県福祉センターを予定しております。

10年前、「震災復興とユニバーサル社会 豊かな福祉社会の創造を」というテーマで兵庫大会を開催したことが懐かしく思い出されます。震災後の20年の間に、人は、地域は、社会はどのように変わった

れていますのでご覧ください。今後も上記のテーマを踏襲し継続されますが、本セミナーで提案された課題が次回のサブテーマとなります。

関西ブロック報告

現場セミナー

関西ブロックは二カ月毎に「関西福祉文化歴史探訪」として歴史・福祉文化に深くかかわる施設、ユニークな取り組みが続いている施設等を訪問し、その事業展開を検証している。



「たんぼの家」の素敵なアート空間

たのでしょうか?被災者自らが語る実践報告、研究発表、討論を展開する中から、多くのことを学びとれる大会にしたいと実行委員一同、取り組んでおります。被災後4年目を迎えた東日本の復興にも通じるテーマであることを念頭に入れつつ……。たくさん参加をお待ちしております。

研究委員会報告

研究委員会では、「よもやませミナール」として、ここ3年間、定期的に会合を持ってきた。そしてこのたびその成果を「福祉文化研究」の特集「福祉文化研究の新天地」としてまとめた。まずは是非この特集をお読みいただきたい。そこにはこれまでの考え方を覆す(?)ひとつの大きな問題提起が書かれている。今後はこの問題提起をたたき台として、福祉文化研究の在り方について、会員の皆様とともに議論をしていきたいと思っている。

その問題提起の内容について、一言だけ書くとしたら、「福祉文化の研究」から『福祉の文化研究』へ」ということになる。これだけ読んでも、頭の中に疑問符がいくつも並びそうだが、その「ところ」を知るためにも、是非特集記事、特に園田顧問の総論をお読みいただきたい。

10月「播磨靖男はなぜたんぼの家を始めたか」というテーマで現場セミナーを開催した。「たんぼの家」は「わたぼうしコンサート」等、多彩な活動を展開し、その活動や理念を日本はもとより世界に向けて発信してきた。

美しく紅葉した高台に建つ「たんぼの家」の住空間はすべてがアートだった。皆さんの作品が心憎いばかりのレイアウトで展示されている。アトリエでは思い思いにご自分の得意なジャンルの作品制作に取り組んでいる。傍らに暖かく見守るサポーター。発足の経緯、理念、アート論、活動の実態、壮大な将来計画を熱く語る播磨さんからは、桁外れの情熱が社会を変えざる原動力になり得ることを学んだ。

27年「たんぼの家」は40周年を迎える。播磨さんの構想は計り知れない。

中部東海ブロック報告

中部東海ブロック活動は、これまで、静岡福祉文化を考える会活動を通じて、専門領域の関係機関・団体や特定市民の関係者を中心とした研修の機会を設けるだけではなく、専門性と市民性を融合合

「よもやませミナール」は、理事交替に伴い、「持ち寄りセミナー」として新たな活動を開始する予定である。新メンバーも募集する予定。さらには東京だけでなく、地方での活動も視野に入れて

理事会の開催報告

1月25日に2014年度第3回理事会が開催されました。主な内容を報告します。

- 1) 「財政健全化検討委員会答申」
- 2) 「福祉文化研究」編集は2015年度(25号)まで印刷続行、その後web化に移行する。具体案は編集委員会を検討し、5月の理事会で提案する。
- 3) 福祉文化実践報告集は原稿が集まらない状況を踏まえ、当分の間休刊とする。福祉文化研究の現場実践論との関係を検討し5月の理事会にあわせて編集委員会から提案してもらう。
- 4) 福祉文化通信は年3回発行(現状どおり)印刷形態を変更し、フルカラーとする。(支出額は減る)
- 5) 収入増に関してはプロジェクトをつくり具体案を構築する。



ジャンボKJ法を使い論議を深める

した市民活動・公開型研修プログラムを開発し、いかにして「わかる福祉」そして「見える福祉」による学びの場が必要かを課題に今年度は「豊かな地域づくりその意識と実態調査研究」に取り組み、1500枚の調査票を回収し、現在分析中である。

「実践活動事業」では、8月から「共創社会実現研究会」を立ち上げて10代から80代の25名の委員構成で、4回にわたり、県内各地の福祉実践活動の事例をもとに、豊に暮らし合う地域づくりを議論した。

「啓発学習事業」では、全て公開型研修会としてのプログラムを組み、5月、8月、11月、1月、3月に開催した。

「理事会における検討」

- 1) 2015年度予算書について一部修正。全の検討委員会の事業方針に沿った支出削減で概ね了承されました。
- 2) 事業計画について、各委員会、ブロックの活動及び予算書がすべて出た訳ではない為に引き続き、5月の理事会で残りの事業を審議。
- 3) 2015年第26回全国大会は神戸開催で承認されました。日時は2015年10月24日(土)25日(日)です。会場は神戸市内4)ブロックメンバーの作成状況会員状況が報告されました。

今回の理事会を以って 第5期の理事及び評議員が任期満了となり、会の最後には参加者全員が、今までのご苦労を拍手で称え、引き続き役員をされる方にエールを送り終了しました。

当日は、現理事以外に、顧問の園田さま 新副会長の永山さま 新事務局長の前嶋さま 新理事の藤原さま 佐々木さまが出席し開催されました。

〈学会員から福祉文化のルーツを
考える視点でお届けします。〉

「〇〇と福祉文化」から 「〇〇の福祉文化」へ

藺田碩哉（日本福祉文化学会顧問）

これまでこの学会が編集してきた単行本の書名や研究誌の特集のタイトル、さらには毎年の大会のテーマ、分科会の表題などを見ていて気づくのは「〇〇と福祉文化」という表現が目立つことです。いわく「高齢者と福祉文化」「障害者と福祉文化」「地域社会と福祉文化」「災害と福祉文化」……など「〇〇と福祉文化」が溢れています。ある用語と福祉文化を「と」で繋ぐと、そこに立派なテーマが浮かび上がってくるということなのでしょう。

よくよく考えてみますと、「AとB」という言い方は、その両者が異なるものであることを出発点にして問題を立てているということになります。例えば「自然と人間」というテーマは、自然に対峙する人間という視点から、両者のあるべき関係を検討するという方向に話が進みます。「高齢者と福祉文化」という発想も、高齢者の生活がまずあって、それに「福祉文化」

という概念をぶつけてみるというかなる知見が得られるか、という方向に話が展開することになります。そこでは「福祉文化」は高齢者の生活の外側にある何やら価値のあるりそうな実体で、それを持ち込むことによって高齢者の生活を改善してやろうという意気込みが感じられます。「福祉文化」を生活に外在する概念にしてしまうと、それは理想化されて「あるべき福祉文化」という方向に論議が進んで行きがちです。

ところが理想的な「福祉文化」というのはよく分からない概念です。価値志向的に福祉文化を考えようとしてしまうと、論じる人の福祉観や価値観や人生観によっていろいろなことを言うことができ、それらはいずれも一理あることになって、どれが本当の福祉文化なのか、決着をつけることが難しくなります。「と福祉文化」論は際限ない論議を繰り広げるだけで収拾がつかないのです。

そこで対案です。「と」ではなくて「の」で行きたいと思うのです。「高齢者の福祉文化」「障害者の福祉文化」とした方が、事はスッキリするはずです。福祉文化を外にあるものとするのではなくて、高齢者や障害者の生活に内在するものと捉えてみるのです。「の」という助詞は所有とか関係とかを意味しています。「私とあなた」というと、これは2つの人格が対等にやり合っている感じですが、「私のあなた」ということになる、2人は深い関係で結ばれていることが感じ取れます。「高齢者の福祉文化」というのは、かみ砕いて言えば「高齢者が現に持っている福祉条件の文化的な側面」ということになります。例えば、老人ホームに暮らす高齢者がどんな生活をしていて、そこにはどんな文化的な特徴があるかを見つめることを意味します。

福祉文化研究とは、社会福祉のさまざまな領域に現に生きている文化を見つめ、それを客観的に記述し、その背景を分析し、問題点を検討することだと思えます。こうした視点で福祉実践を批判的に考察することがこれからのこの学会の課題ではないでしょうか。

完

*2014年度の『文化の交差点』は藺田碩哉にお願いしました。お忙しい中、連載いただき大変ありがとうございました。この文化の交差点は、お一人の方より年度を通じて「福祉文化」をさまざまな切り口から執筆いただく内容となっております。2015年度も新たな方から執筆をお願いしております。どうぞご期待ください。

事務局より

第5期の役員のみなさまへ、学会の活動、特にこの間は2011年3月11日の東日本大震災に伴う支援活動等もあり、さまざまなご努力をいただきました。

また、ブロック活動や委員会活動も大きなうねりとなって次の活動に引き継がれました。今後とも学会活動にお力をお寄せ下さいますようお願い申し上げます。3年間お疲れ様でした。そしてありがとうございます。

◎2014年度、2015年度の会費納入、よろしく願っています。

会員入退会情報

●2015年2月15日までに、ご入会された方のお名前と所属ブロックをお知らせ致します。（敬称略）

谷俊英（関西）、高橋健一郎（関東）

編集後記

●転居先不明の方のお名前と所属ブロックです。連絡先をご存知の方は、事務局までご一報くださいますようお願い致します。（敬称略）
高橋睦美（中部東海）、晝間文子（関西）

新年度を目前に、本学会も4月から第6期新体制がスタートします。1989年に発足した日本福祉文化学会には沢山の実践活動と研究成果が生まれています。（会のあゆみについては、学会ホームページを参照ください。）会員の皆さん一人ひとりの活動、つながりが長い歴史を物語っています。

この歩みを更に進めるために皆さまからこの会を周知PRしていただき、活動の活性化、会員の増加を含めた協力者になって頂ければと考えております。

会員の皆さまから、会の発展について等ご意見などありましたら、お気軽に事務局までお寄せください。

（広報担当・稲田）

